

同志社大学国文学会彙報

昭和五十一年度国文学会活動状況

△教育問題・国語教育研究会（八月二十七日・勤労会館）▽

・教育問題

偏差値をめぐる問題提起

犬島 良二（大阪市立大宮中学）

徳永光次郎（桃山学院高校）

・国語教育

高一古典入門教材の扱い

——「今昔物語」と「平家物語」——

小関真理子（京都市立紫野高校）

△総会・研究発表会（十一月二十三日・教育文化センター）▽

・実践報告

自主教材——「科学的精神とヒューマンイズム」をめぐるって

加藤 昌孝（同志社香里高校）

・研究発表

晩年の世阿弥——おもに作品分析をとおして

岩本 京子（大学院生）

△国文学会講演会（十二月十五、十六日）▽

言語研究のすすめ

つちくれの語り部

松下貞三
広川勝美

昭和五十年卒業論文題目

△日本文学古代前期▽

日本神話

——記紀神代巻にみる原形神話——

天孫降臨神話の歴史的背景

ヤマトタケルの葬歌と土師氏

ヤマトタケル命物語について

小長歌試論

初期万葉の長歌について

遊行女婦と娘子群

万葉集東歌

防人歌の抒情性

高市黒人の世界

挽歌の成立

人麻呂挽歌論

大木保幸
鐸木潤子
谷口栄一
富永恵子
田中豊彦
池永肇志
可部和子
諏訪優子
杉浦良子
杉村幸子
岡田町子
西村直彦

人麻呂の死をめぐる伝承

中岡慶子

紫上について

日野真理子

△日本文学古代後期△

「日本霊異記」の撰述意識

吉川潔

「源氏物語」における末摘花の存在価値

稲葉由美子

古今和歌集の自然

橋本昌代

源氏物語に於ける末摘花の存在価値

多田素子

——四季の部を中心に——

鷲田正之

六条御息所論

山和裕子

貫之私論

岡村庸子

源氏物語の女性 明石君

有田真由美

「土佐日記」和歌の考察

住本和子

玉鬘十帖の世界

——玉鬘をめぐる——

伊勢物語の構成

筒井恭子

光源氏物語試論

津林厚子

歌物語

石倉美智

——物語史的展開の基本的構造——

小島繁一

「枕草子」にみる清少納言

加藤真紀子

光源氏の終焉

堀江牧子

枕草子における清少納言の美意識

岡田夏子

宇治十帖の一サイクル

——橋姫・椎本・総角を中心に——

「枕草子」の根底に流れるもの

澤井利江

大君物語

山下和之

枕草子は果して明るいか

杉本季美枝

——結婚拒否をめぐる——

東登志子

清少納言の世界

居関久美

宇治十帖の世界

家集からみた紫式部

——古代仏教における女人往生思想を

背景に浮舟の死そして出家——

伊藤富士子

「紫式部」

——文学創造へ向かう式部の内面について——

源氏物語における横川僧都と仏教

小川純子

「紫式部日記」における「心ばへ」観

片山葉子

提中納言物語「蟲めづる姫君」論

永田智子

「紫式部日記」における「心ばへ」観

中谷純子

「虫愛づる姫君」について

松本保雄

更級日記についての考察

——主として作品の底を流れる

テーマと悔恨について—— 守屋 絹子

徒然草論

田中 未知子

△日本文学中世▽

「平家物語」の運命と女人像

伊藤 圓美

△日本文学近世▽

「好色一代男」論

青木 匡子

「好色一代男」

細野 洋子

好色一代男の魅力

田中 増雄

平家物語における「語り」と文学

——覚一本の達成とは何か—— 佐伯 真一

仮名草子から浮世草子へ

——「好色一代男」と

木曾義仲の魅力

——覚一本平家物語世界の——

「浮世物語」をめぐって—— 川本 まゆみ

平家物語における平清盛像

重松 勲

「清経論」

鷲見 匡子

鬼能考察

複式夢幻能の成立と世阿弥

笹木 洋

「建禮門院右京大夫集」

宮 ゆき子

——作品世界の展望——

藤井 房子

式子内親王の世界

鈴鹿 晴子

中世のあけぼの

吉岡 千砂子

——西行の歌を中心にして——

上柳 ゆり子

慈圓と浄土教的感性

北澤 広泰

女殺油地獄 作品論

大浦 和子

蕪村論

志儀 真由美
藤井 美香子

近松時代浄瑠璃 ——「国性爺合戦」の構造と方法——

上原 ちえ子

「好色一代女」考

田中 しのぶ

「好色一代女」考

大橋 真美子

「好色五人女」考

江口 達也

「好色五人女」考

中内 陽子

「好色一代女」考

塩津 順子

「好色一代男」考

沢田 春美

△日本文学近代・現代▽

「雨月物語」

秋成の浮世草子

「黄表紙考」

黄表紙考

樋口一葉

鏡花作品の構造とその背景

舞姫論

国木田独歩と人生の問題

藤村の初期「自然」観

——労働の意味——

漱石と近代知識人

「こころ」試論

△こころ▽覚え書

——一人称小説の系譜——

「それから」私論

——意識の論理と自然の論理——

「それから」論

「明暗」について

中井久美子

天田ちあき

岡山光子

高橋雅子

原和子

田中勲儀

村松和子

藤原邦章

高木貴久

興津正江

鶴園誠

津留見幸一

西沢澄子

岡本陸子

中村松子

長塚節「土」の世界

宮沢賢治論

宮沢賢治の童話の世界

立原道造試論

伊東静雄論

小林多喜二

「転向論」

——中野重治を中心として——

堀辰雄論

太宰治

太宰治「斜陽」論

太宰治論

——太宰治と愛の問題——

太宰治論

——故郷への憧憬——

新美南吉論

今江祥智論

椎名麟三論

——椎名麟三における自由の探求——

唐十郎論

山岸添子

石原仁

石川雅子

内田希代子

佐々木俊郎

尾藤武宏

和田憲司

高橋素明

下岡英生

辻暁子

森田澄子

松浦由美子

巽夕里子

松四明

森安雄生

河合功

芹沢光治良論

——作品「人間の運命」を

中心に愛と死について——

川崎 隆子

野坂昭如

高木 一佳

安部公房論

——人間存在のあり方——

西村 将幸

山本周五郎私論

工藤 明美

△国語学▽

言語学基礎論

——形態論と意味論の

再規定及び展開——

志伊 良真

日英語の比較

真辺 由美枝

和語「よ」と漢語「せ」との交渉

——外来思想輸入の一つの場合——

湯屋 純子

塩飽方言の言語地理学的考察

椎田 真帆

今昔物語集の文体

長野 朋子

枕草子の文体

三木 令子

虚子における写生文と言文一致

川崎 喜美恵

太平記の「候ふ」

亀井 啓子

新古今和歌集における本歌取りについて

原田 知恵

昭和五十年年度修士論文題目

日本書紀の編纂と阿部氏

西原 啓子

草香部吉士の伝承と日本書紀

小妻 裕子

柿本人麻呂——その歌の場と文学——

加藤 礼子

「伝承社会の源氏物語」

——人間の類同観念と他者の発見——

広田 収

遁世聖説話考

小関 真理子

編集後記

同志社大学の国文学専攻が設置されて二十年を経過してから、すでに三年の月日が流れた。この間に、小さな営みの積み重ねにせよ何かが生み出されているにちがいないと思いたい。その一つの証しが今号にも掲載した卒業生の論文であれば幸いである。

国文学専攻創立以来、学生の指導にあられた小森啓助先生が退職されることになった。卒業生の一人として心からお礼申し上げる。なお、先生には、講師として今後も御指導いただけることがせめてのなぐさめである。今号より設けた「視点」の最初の執筆をお願いしたのもささやかな記念になればとねがったのであった。

「国文学会会報」は郵送料の関係上、休刊することとなったのを付記しておく。
(広川)